

五大力菩薩の曼荼羅について

——仁王經曼荼羅の一形態——

井ノ上（下松） 徹

仁王經曼荼羅の中尊となる尊像は、一、五方菩薩（般若菩薩）、二、五大明王（不動明王）、三、五大力菩薩である。仁王經曼荼羅は、不空訳とされる『仁王經儀軌』を典拠としてわが国で考案されたものだが、同儀軌に五大力菩薩の名を見ることはできない。五大力菩薩は、羅什訳とされる『旧訳仁王經』『受持品』に説かれる尊像で、本来、方位を持たず、曼荼羅的な配置法もとらなかった。

ところが、五大力菩薩は、不空訳とされる『新訳仁王經』『奉持品』『仁王經儀軌』所説の五方菩薩と対応関係をもつという説が台密の間で提唱されるようになる。この説で注目すべきは、五方菩薩の方位により、五大力菩薩を曼荼羅上にアレンジしようとしたことである。本稿では、台密の五大力菩薩を中尊とする仁王經曼荼羅について考察する。

一

『旧訳仁王經』の五大力菩薩と『新訳仁王經』の五方菩薩とを対応関係に置くという伝統は、台密において早くからあった。それは五大院安然（八四一〜九一五頃）述とされる『瑜祇經疏』三から窺える。

表一、安然説による新・旧五菩薩の対応関係

五方菩薩		五大力菩薩	
東方金剛手菩薩	一	金剛吼菩薩	一
南方金剛宝菩薩	二	龍王吼菩薩	二
西方金剛利菩薩	三	無畏十力吼菩薩	三
北方金剛藥叉菩薩	四	雷電吼菩薩	四
中方金剛波羅蜜多菩薩	五	無量力吼菩薩	五

しかし、安然説の時点で、直ちに五大力菩薩を中尊とする仁王經曼荼羅が考案された形跡はない。台密の学匠の中には

この安然説を支持しないものもある。

例えば、承澄（二二〇五―二八二）撰の『阿婆縛抄』⁽²⁾七三に引く聖昭（二〇六〇頃）の伝によると、智泉房覚範（二〇九一頃）の頃すでに安然説に対する批判があったことがわかる。すなわち、聖昭が伝える覚範の批判は、安然説が新・旧『仁王經』に説く五菩薩を機械的に併記したに過ぎないとする。覚範は新・旧『仁王經』五菩薩の關係をつぎのように見る。

表二、覚範説による新・旧五菩薩の対応關係

五方菩薩	五大力菩薩
中方金剛波羅蜜多菩薩	一金剛吼菩薩
南方金剛宝菩薩	二龍王吼菩薩
東方金剛手菩薩	三無畏十力吼菩薩
北方金剛藥叉菩薩	四雷電吼菩薩
西方金剛利菩薩	五無量力吼菩薩

この覚範説に依拠し、新・旧『仁王經』五菩薩の対応關係を説明するものとしては、静然撰『行林抄』⁽³⁾一六に載せる二図をあげることができる。『行林抄』の二図は、いずれも西方上位の十字形の諸尊配置図で、上段の一図が五方菩薩、下段の一図が五大力菩薩の図となっている。『行林抄』はこの二図で、新・旧『仁王經』に説く五菩薩の対応關係を明かす。

『行林抄』の図は、新・旧『仁王經』五菩薩の対応關係を

持物等で図像学的に説明するなど、覚範説には見られなかった新しい傾向を示す。この傾向は、静然の師である相實（一〇八一―一二六五）の図にも見られる。この相實の図も『行林抄』と同様、覚範説に従い一の金剛吼を中方に配し、残りの二、三、四、五の菩薩を南、東、北、西の順で置いている。

このように、台密の五大力菩薩の配置法においては、安然説より、覚範等の説が大勢を占めている。しかし、『行林抄』の二図や相實の図は、単に諸尊の配位を示した案と見るのが穩当であろう。事実、これらの配位案がそのままの形で、修法本尊として作画された形跡も見当たらない。

二

五大力菩薩を中尊とする台密の仁王經曼荼羅としては、石山寺聖教中の白描図の一本（鎌倉後期写）をあげることができる。この石山寺本は、これまで台密とのかかわりについて論じられることがなかったものだが、今回の考察で、この本の成立には山門の学匠の説が關係していることが判明した。

それは、つぎの二つの事実からわかる。①、石山寺本の中尊五大力菩薩の配置法は、一の金剛吼菩薩を中央に、二、三、四、五の四大力菩薩を南、東、北、西にそれぞれ位置させるというもので、前述の覚範等の説と同じ内容となっていること。②、曼荼羅の構成に至っては、『仁王經儀軌』のみなら

ず、長宴（一〇一六―一〇八二）記の『四十帖決』七所載の師説、すなわち皇慶（九七七―一〇四九）伝の道場觀と略図に大筋で依拠していること。

石山寺本は、東密の仁王經曼荼羅のいずれの形式とも一見して異なっている。この石山寺本は、北方上位の四重壇を構成し、五大菩薩が位置する中心のフレームを輪宝形にするところが特異である。また、尊像の姿は一切描かれず、月輪中の尊名の墨書のみにて五大菩薩（対応の五方菩薩は、一部顕教名で記される）、四摂・内四供の配位を表現している。このことから、石山寺本は實際の修法で用いる曼荼羅の下図的存在であったことがわかる。

石山寺本の構成は、阿闍梨の口伝に重きがおかれているため、儀軌のみで説明することができない。たとえば、石山寺本の中心部のフレームが輪宝（四幅輪）の形となっているのは、『四十帖決』所載の皇慶の道場觀に出てくる十二幅輪のイメージを引くものと推察することができる。ただ、石山寺本では十二幅を四幅に省略しているが、これは諸尊を輪宝上に配置するための措置と見てよいだろう。

また、石山寺本のように、新・旧『仁王經』、『仁王經儀軌』の尊名を各々併記する表現は、『四十帖決』の道場觀に、金剛波羅蜜多あるいは、金剛吼のいずれともとれる中尊の曖昧な記述があることと何らかの関係があると見ることもでき

る。いずれにせよ、台密には、新・旧『仁王經』、『仁王經儀軌』の諸尊を対応させて結びつける伝統があるので、石山寺本もこれに倣ったものと考えてよからう。ただし、石山寺本の表記では、あくまでも五大菩薩が主となっていることに注意を要する。

三

つぎに、台密諸師が仁王經法の本尊をどのように捉えていたかという問題を考察しよう。

『阿婆縛抄』七三に引く院昭の『聖行房決』によると、皇慶は、仁王經法の本尊として、五大菩薩の絵像とか曼荼羅を懸けていたことがわかる。また、『阿婆縛抄』の著者承澄は「大原決」、すなわち『四十帖決』という仁王經法の本尊を五大菩薩に限定している。

しかし、長宴自身は、儀軌所説の金剛波羅蜜多と本体とされる般若菩薩を仁王經法の本尊としていたことが、同じく『阿婆縛抄』の伝によりわかる。前述の『四十帖決』に新・旧いずれの菩薩ともとれる中尊の曖昧な記述があるのは、実に長宴の仁王經法に対する本尊の多様性が関係しているのである。

実際、良祐（一〇五九―一一三二）撰の『三昧流口傳集』⁽¹⁰⁾上に、先師安慶、長宴上綱の説として、興味深い記述がある。

例えば、仁王經法を修す際、般若菩薩像は必ずしも安置しなくてもよいとし、これに代えて五大力菩薩の三昧耶曼荼羅を請用すべしと説く。この記述を信するならば、長宴は、仁王經法において般若菩薩と五大力曼荼羅とを同等と見做し、この二種類の本尊を使い分けていたことになる。しかもこの長宴らの口伝では、後者の方が重要視されていたことがわかる。

これまでの考察から、台密では、皇慶にさかのぼって、五大力菩薩を仁王經法の本尊としてきたことが理解できた。皇慶の弟子長宴、安慶の代には、五大力菩薩を中尊とする石山寺本のような曼荼羅が、般若菩薩像とともに、台密の仁王經法の本尊として定着してきたのであろう。

長宴が仁王經法の本尊として五大力菩薩を請用していたことは、東密の寛信（一〇八四—一二五三）撰『傳受集』⁽¹⁾四にも触れられており、当時の有名な話であったと推察できる。

四

最後にまとめとして、台密側で何故に五大力を中尊とする仁王經曼荼羅が考案されたか若干の私見を述べよう。

皇慶・長宴が石山寺本のような五大力を中尊とする仁王經曼荼羅を考案していたことは、以上の考察からも十分承認されてよい。彼らが活躍した一〇世紀末から一一世紀初め頃といえ、偶然にも、東密の二大流派でそれぞれ新しい仁王經

曼荼羅が考案されている。すなわち、広沢流寛朝（九一六—九八八）の般若菩薩の曼荼羅と小野流仁海（九五—一〇四六）の不動明王の曼荼羅がそれである。

この一〇世紀末、一一世紀初め頃は、東密、台密ともに諸流の分派がはじまった時期でもある。あるいは、皇慶、長宴は、東密に対抗して台密独自の石山寺本のような五大力による仁王經曼荼羅を考案しようとしたのではなからうか。その背景には、新・旧『仁王經』の五菩薩を対応させるという台密の伝統があったことは前に指摘したとおりである。

- 1 大正蔵六一卷五〇二頁中—五〇三頁上
- 2 大正図像九卷一二七頁中
- 3 大正蔵七六卷一三七頁
- 4 大正図像九卷一二七頁中
- 5 大正図像一二卷別紙九
- 6 大正蔵七五卷八九頁上—中
- 7 大正図像九卷一二六頁下
- 8 大正図像九卷一二六頁下
- 9 大正図像九卷一二八頁中
- 10 大正蔵七七卷一二頁下
- 11 大正蔵七八卷二四九頁下
- 12 錦織亮介「仁王經曼荼羅図の形式—儀軌と図像の間—」『仏教芸術』一〇一号参照。

〈キーワード〉 五大力菩薩、仁王經曼荼羅、台密

（高野山大学密教文化研究所助手）